

1、テキスト

「働くもの」「二」。第 7 段落。197 頁 1 行目～198 頁後から 5 行目まで。

2、テキスト要約（前回のキーワード、キーセンテンス）

「前回の概要」（第 6 段落後半、196 頁）

- ① 「純粹統覚」としての「具体的一般者」は「単なる性質的一般者」と異なっている  
のである。
- ② 「純粹統覚」としての「具体的一般者」も「単なる性質的一般者」の根柢には「自  
己同一なるもの」がある。しかし、前者（「純粹統覚」）の「自己同一なるもの」  
は、後者（「単なる性質的一般者」）の「自己同一なるもの」の「自己同一」でなけ  
ればならないと西田が考える。  
つまり、「純粹統覚」の根柢にある「自己同一」は「性質的一般者」の「自己同  
一なるもの」よりもっと根本的であり、次元が違うものである。
- ③ それでは、「性質的一般者」の根柢にある「自己同一なるもの」とは何か。  
それは「個物」として考えられる。  
例えば、塩は「白い」「辛い」…などの性質を有しているものと考えerる場合は、  
これらの性質を統一する「性質的一般者」の背後には、あるいはその根本には「塩」  
という「個物」—「自己同一なるもの」がなければならないからである。
- ④ 一方、この段落では、話題の中心が「個物」というより「一般者」と見られる。個  
物はそもそも具体的一般者の自己規定（「内面的発展」）によって成立するからであ  
る。こうして、「自己同一なるもの（引用者：個物）の自己同一」である「純粹統  
覚の自己同一」はこのような「具体的一般者」と考えられる。
- ⑤ 「具体的一般者」としての「純粹統覚の自己同一」とは如何なるものであるか。  
「私の表象」に常に「私が考える」が伴い、「私の表象」は同時に「私の表象を考  
える私」である。この場合、「経験内容が自己の中に自己を映すものでなければな  
らない…赤の一般者が自己自身を限定することによって最後に達し、唯一の個物と  
なる」。こうして、自己の同一なるものとしての個物は実は、具体的一般者が「主  
語」となって自己自身を限定することによって成り立つ「唯一の個物」であるはず  
である。言い換えれば、「自己同一なるもの」（個物）は主語となる一般者、つまり  
主語的一般者として考えられる。
- ⑥ このように、西田が「経験と概念との結合」である「自己同一なるもの」を「主語  
となって述語とならない」「基体」、つまり「主語」の方向に求めているのである。  
この道程では、主語となって述語とならない個物は、「自己の中に自己を限定する  
もの」となり、究極的にはアリストテレスの「自己自身を考えるもの、形相の形相」  
のようなものに到着する。

かくして、第 6 段落の後半では、あくまでも「具体的一般者」（純粹統覚）の「主語  
面」にめぐって議論されている。そして、第 7 段落では、「具体的一般者」（純粹統覚）  
の「述語面」が議論の中心として論じられている。

「第 7 段落」（197 頁 1 行目～198 頁）

- ① 「経験的知識の根柢には、主語となって述語とならないもの（引用者：個物）の  
述語的一般者がなければならない」という。上述したように、6 段落では主に「概

念的知識」(経験的知識も含めて)の根柢を成す具体的一般者の「主語面」—「自己同一なるもの」について論じられているが、この段落では、具体的一般者の「述語面」—「自己同一なるものの自己同一」である「純粹統覚の自己同一」が話題となっている。したがって、「純粹統覚」はここで述語の方向を意味している。

- ② この場合も、主語的一般者と同じように、概念的知識の「概念的統一も、その統一を徹底するにあたって、相異又は反対の統一より矛盾の統一に達する」。
- ③ 具体的一般者の述語の方向に沿って考えると、「構成的範疇の世界」も「反省的範疇に於いて成立し、反省的範疇の性質に従わなければならない」。ここで、「反省的範疇」は述語的一般者の方向に属していると考えられる。
- ④ こうして、経験内容が「主語となって述語とならない最後の種差」、即ち「個物」となるには、「私の表象そのものが表象せられなければならぬ、表象の表象というものがなければならない」。即ち、経験内容(私の表象)は述語的一般者において映されるからこそ個物となる。したがって、表象の背後にそれを「述語」の方向に超えたものがある、いわゆる「表象の表象」。このような述語的一般者において初めて主語となって述語とならない個物が考えられる。
- ⑤ それ故、「経験し得る物の類概念—個物という概念自体が一般である—は述語的一般者によって成立する。そして、西田は個物という一般概念(「物の世界を統一する類概念」とは何か、それにおいて特殊と一般の関係がどのようになっているかについて論じている。

1、単なる類概念(所謂類概念)では、特殊<一般

2、個物では、特殊>一般

3、物(個物)の世界を統一する類概念では、「一般を含める特殊」(個物)＝一般

したがって、物の類概念は上述したように、表象を述語の方向に超越したもの、いわば「表象の表象」であり、その成立は「自己が自己を離れて見る」ことによる。言い換えれば、主語を離れてそれを内に包む述語の方から見るのである。

- ⑥ そして、西田は述語的一般者の方向において、概念的知識の根柢を成す「矛盾的統一」を見直している。

1、「数の概念」(単なる類概念の統一)では、「一般と特殊が直ちに結合する」。故に矛盾的統一が考えられる。

2、「非合理的なる経験内容の統一」(個物・経験的知識の統一)では、「どこまで特殊と一般とは直ちに結合することはでき」ない。

この場合、一般(類概念)はその根柢に徹底して物の世界を統一する類概念になっていないからである。そのため、「矛盾の統一は成立せない」。

3、純粹統覚では、「経験的知識の一般と特殊が直ちに相結合し、矛盾的統一にも達する」。なぜなら、これ(映す鏡)において、超越的なものが同時に内在している(自覚)。一方で、「思惟の立場」から見れば「経験の内容は非合理的であり」、思惟せられないものである、他方で、それはどこまでも「表象し得るもの」でなければならない。即ち、それは表象として「思惟し得るもの」である。

つまり、純粹統覚という鏡では、一見して矛盾している両方向は結合されている。西田は、このような超越的なものの内在化を「自覚」と主張している。

### 3、「哲学的問い」

直観(宗教的覚悟)の立場に立って、そこからすべてを論じる(論理)という西田の論

じ方、立ち方は有効・妥当であるのか。